

式辞

諸君

亀山の木々の芽もほころび始め、新しい息吹を感じるこの佳き日、第七十一回山口大学教育学部附属山口中学校卒業証書授与式を挙行いたしましたところ、多数のご来賓の方々、そして、卒業生保護者の皆様のご臨席を賜り、心より感謝申し上げます。

陰になり日向になり、今日までお子さんを育ててこられた保護者の皆様。これまでのご苦勞に深甚なる敬意を表しますとともに、お子さんのご卒業を表心よりお祝い申し上げます。

本日は、誠に御めでとうございます。

さて、卒業生諸君。本校の学校スローガンは「人間を学ぶ」です。スローガンも何回も聞いていると分かった気になつてしまいます。「人間を学ぶ」とはどのようなことでしょうか。

それに対してまず「人間」を対象にして様々な視点から学問的に学ぶという在り方が考えられます。しかしそのような問い方ではどこまで行つても「問う者」としての「自分自身」が問われないままです。しかし問題であるのは「自分自身」、すなわち自分がその身に生まれしてきた「人間」です。このような「人間」

が同じになるのはどのような時でしょうか。それは「苦悩」の時です。「どうしてこんなに苦しいんだろう」、このように人間は苦しみ悩む時に始めて自分がその身に生まれてきた「人間」を切実な問題として考えるようになります。

諸君も人間の身に生まれたからこそ経験しなければならぬ苦悩があるはずです。そこで諸君に質問です。諸君はそうした苦悩を通じて「人間」をどのように学びましたか。「人間」とはどのようなものですか。これは宿題として出しておきましたね。

辛いこともあったけど諦めないことを学びました、辛いことがある中で友達

の大切さを学びました、というような答えを準備してそれで済んだと思っっている人が多いのではないのでしょうか。しかし頑張ることによって人間の不安が根本的になくなるのでしょうか、友達を持つことで人間の孤独は根本的に解決するのでしょうか。考えてみてください。言葉が出て来たら手を挙げてください。（生徒は釘を刺されて苦笑いをしている。しばらく沈黙が続く。）

生徒甲「苦しみ悩んだときに自分が空っぽになって、そこに本質ではない存在があると思います。」

—みなさん分かりましたか。これは「実存は本質に先立つ」という実存主義の考え方です。彼は苦悩を通して、役割だとかそういうものでない、空っぽの自分に出会ったと言っているのです。他に。

生徒乙「人間は他者に依存していると思います。いつも他人の目が気になっているし、他人と比べて自分がそれほどかっこよくないとか。」

—なるほど。そのことによって人間は苦悩を抱えることにもなりますね。他に。

生徒丙「人間は苦悩を抱えているけれど、

他者と共にいることで、苦しみはなくな
らないけれど、薄まっつていくと思いま
す。」

— 誰しも悲しみを抱えている。その悲し
みは底なしに深い。それが他者に受け止
められることによつて癒されると。

どれも素晴らしい答えだと思えます。

「人間を学ぶ」とは「自己に向き合う
こと」「自分自身を知る」ことです。古
代ギリシヤのアポロン神殿の入り口に
は「汝自身を知れ（グノーティ・セアウ
トン）」という格言が掲げられていまし
た。これは「自分自身を知れ」というこ

とですね。

しかしこの格言は神ならぬ人間にその「身の程を知れ」という戒めでもありません。この戒めからすれば、人間は自分自身を知ることにはできません。

しかし人間が「自らの無知を知る」という「無知の知」が遂にソクラテスをして「**真実の自己**」に目覚めさせたのです。これは「自分は無知を知っている」といばっているのではありません。

「人間を学ぶ」すなわち「自分自身を知る」ということは自分自身を知ることにはできないということを通じて、目覚めとして達成されるのです。

真摯に生きるとは自己に向き合うと

いうことです。真摯に生きたいと願わぬ者はいません。心の底から不真面目な人生でよいなどと思う者はいません。それはこの願いが自分を超えたところから起っているからです。そうして人間は真摯に生きんとする。しかし真摯に生きんとすればするほど、自分が真摯であるとは言えなくなりません。自己批判力が増すからです。この葛藤が行き詰るところで転換が起こります。自分が真摯に生きるのではない、真摯に生かしめんとする働きが真摯なのだ、転換とはこの気づきにほかなりません。

「どこまでも分からない深い人間」、それが我々を促して真摯に生かしめん

とじているのです。そうした働きに出会うこと、このことが人生において始めて起こること、それが学びの門が開くこととしての入門、真の入学です。それは分かっているつもりの方が生きているのではなく、「どこまでも分からない人間」に生かされて生きていることへの生き方の転換です。

「教育とは魂の向け変えの技術である」とはプラトンの言葉です。

そうしてこの「どこまでも分からない人間」に導かれて、これをどこまでも学び続けて行く身が定まること、それが真の卒業です。

卒業とは「人間になる」ことですが、

それは出来上がることではありません。どこまでも分からない人間の身に返ることです。そうしてどこまでも「人間を学び続けること」です。

諸君。

人間に成ってください。人間を学び続けてください。そうして本当に手の合わさるような人間の深みに出会ってください。そのような深みに導かれて、嬉し
いときも、悲しいときも、分かってても分からなくても、人間を学び続ける身が定まる時が、今日この日の神聖な卒業式という儀式が成就する時です。その時に本日
の「卒業おめでとう」という言葉を自

分にごえて下さい。

第七十一回卒業生百三十九名の前途に
幸多からんことを心から祈り、式辞とい
たします。

平成三十一年三月九日

山口大学教育学部附属山口中学校
校長 佐野之人

卒業式後、三年生の生徒が尋ねてきました。

「人間とは幸せを追求する存在だと思います。」

— 幸せとは？

「心が豊かなことです。」

— 心が豊かとは？

「敏感な感覚を持ち、人生をプラスに考えることです。」

— 前向き志向ということ？

「うーん。それは少し無理があるから違う。食べ物でもおいしいものもあればまずいものもあります。」

—食べ物と人生を重ね合わせ
せて考えることができると思
うこと?」

「はい。」

—なら、深い味とそうでない
味がありそうだね。

「はい。それで先生はどうお
考えですか」

—君の考えはとても面白い
と思うよ。さらに考えてごらん。